

2016年12月26日

札チャレラジオ通信 第50回

加納：三角山放送局をお聞きの皆さんこんにちは。札チャレラジオ通信のお時間がやってきました。札チャレラジオ通信は、自立を目指す障害のある人がITでマザル、ハタラク開きあう社会をつくりたい、そんな思いで活動しているNPO法人札幌チャレンジドが毎週月曜日午後3時から3時30分三角山放送局でおとどけをしています。私は札幌チャレンジドの加納です。こんにちは、よろしくお願いします。今日は私のパートナーは札幌チャレンジドの事務局長の岡野さんです。岡野さんよろしくお願いします。

岡野：はい、よろしくお願いします。こんにちは。

加納：やあ、降りましたね。腰は、大丈夫ですか。

岡野：恥ずかしながらやっと2週間経ってこうやって通常通り歩けるようになりました。

加納：なかなか1回やると大変ですね。

岡野：はい。

加納：きっとラジオを聞いている方もこの大雪で散々な目に遭ったと思っている方もたくさんいるのではないのでしょうか。そんなことで北海道らしいって言えば北海道らしいんですけど。これだけ雪の降る町に190万の人が住んでいるわけですからすごいことですよ。ただ今年は一気にかかなりの量が降りましたからね。だから今までの冬とはちょっと違う感じで。今日もまだバス、公共交通機関でバス路線がまだ除雪・排雪が上手くいかないってニュースで出ていましたからね。

加納：うちはさまざまな障害のある方が札幌チャレンジドの事務所に通っておられますけど、結構「遅刻しそうになりました」とか、「遅刻しちゃった」みたいな人もいましたね。

岡野：今日は事務局で1名遅くなったんですよ。

加納：そんなところですが、この札チャレラジオ通信は2016年の1月11日から始まりまして、2016年間、1年限りで三角山放送局さんにご協力いただきまして今日が第50回最終回ということになりました。早いですね、ほんと早いんですよ。自分が出た回はそ

んなに多くはなくても皆で重ねてきた回を数えてみると 50 回にもなるということですね。なかなか考え深いですよ。閉めの回になりますので。それでは進めていきたいと思います。ここ 4 週間ほどは各グループのメンバー皆に出させていただいて、それぞれのグループでそれぞれのグループに関わっているゲストの人に来ていただいて毎回放送していたわけですが。1 年間のラジオを通じての感想ですとか、特にどんなゲストのときの話が心に残っているとか、この辺の話を聞かせてもらっていますが、岡野さんはいかがでしょうか。

岡野：本当に 50 回最初はメンバー、職員が MC をやるということでハラハラ・ドキドキで。放送事故がいつ起こるのかなとちょっとドキドキしながら聞いてたんですけど。まあそれなりに緊張の中でもありながら、本当にいろいろなゲストの方の協力を得ながら放送が進められたのかなと思っています。ちょっとこの 50 回、丁度いま日程表。

私上の方にあるんですけども。見てみますと、ゲストの方が 44 名。ゲストの方にご参加いただいたんですよ。だからこの多くの人方にわれわれ札幌チャレンジドが支えられて、いままで 16 年。これからも札幌チャレってというのがこういう人たちと一緒に歩いていくなかっていうこと。特にラジオって、私何か継続してラジオに出させていただいたんですけども、そういう意味ではよりいままでのボランティアさん、利用者さんあるいは外部のいろいろ支援者さんと繋がりができたのかなと思いますね。

加納：私もゲストにどんな方が来たかっていうリストを見ながら一緒にいましゃべっているんですけども。本当に多才といいますかすごく多様な関わりの人がいて、「ありがたいな」というのを実感しますね。

岡野：そうですね、実際こうして見てみますといま現在札幌チャレンジドに来ていただいている就労の A 型の方とか、移行支援の方で 17 名くらい出ていますね。あといろいろパソコン関係だとかそれ以外にボランティアさん、講師だとかボランティアさんでも 11 名。あと外部支援者、取引先関係だとか、いろいろそういう支援者の方が 16 名ってこういう方々に出てきていただいて。一番若い方でいくと大学生のボランティアさんの方も。

加納：北星学園の。

岡野：そうです、ソーシャルビジネスサークルプラスプラスさんの

加納：19・20 ぐらいですか。

岡野：二十歳くらい。

加納：2年生ですね。

岡野：多分一番若い方が、このプラスさんのボランティアさんで、一番年配者はボランティアさんの千代さん。87歳。

加納：すごい。20歳から87歳まで。それはすごいな。もともとの趣旨がスタートするときに、札幌チャレンジドの活動内容をリスナーの皆さんに聴いていただきたい、世の中の人に少しでも知ってもらいたいというところから始まって、その時に自分たちでしゃべるんじゃ、1年間もたないよねっていうのもへんですけど。やっぱり自分たちに関わってくれている人の言葉を通して札幌チャレンジドのやっていること、やっている価値を伝えていきたいということだったので、そういう意味では本当にお一人おひとりの力のおかげで。もしこの放送を50回全部聞いてくれている人がいたら、なかなかいないと思うけど、「なかなか多才だったな」と思っていただけだと思いますが、まあそんなところですが。岡野さん的にはどんなゲストのお話が印象に残っているでしょうか。

岡野：そうですね実際私の方では実際取引いただいている、東京からわざわざ実はこの放送で来ていただいた、インフィニさんの山崎部長さんですとか、ニフティーの佐久間部長さん、この方々がこの札幌チャレのこのラジオに出ていただけませんかと言ったときに快くお引き受けいただいて。本当にわざわざ来ていただいて、この30分番組のためにね。

加納：そうですね、このためにね、経費かけてね、申し訳ないですよ。

岡野：でもその中でいろいろ山崎部長だとかやっぱり初めてこういう障害支援の所とお付き合いして。それも仕事での付き合いですよ。

やっぱり職員の方がずいぶん見る目が変わったっていうか。そういうのがすごく変わってきたっていうちょっとお話もいただいて。まあそういう意味では仕事が一番できた

いう喜びもありますけれども、世の中でこういう障害者の方が働いてそれが実際にいまの世の中のベースをつくっている仕事があるんだよっていうのも理解していただけたのかなと思ったりもして。

加納：札幌チャレンジドは理念としてITでマザル、ハタラク、開きあう社会をつくるっていうことで行っていますが、企業の方との仕事でのお付き合いっていうのはまさにその理念三つを集約した関係性っていうのがうまれるのかもしれないですね。

岡野：やっぱりそうですね、企業さんが一番ITでマザル、ハタラクっていう意味では、

つながりが出てくると思うので。

加納：で、その企業の社員の方がいままで障害のある方との接点がない方が多くて、そういう人が実際にさまざまな障害のある方と仕事をしたときに何を感じるのかとか、次の自分の仕事にどう結びついていくのかっていうところがまさに社会を開きあうっていうところにすごく本質的にはつながっていくのかな何て思いますけどね。

岡野：そうですね、実際に一般の企業さんでもCSRっていうか社会的責任を果たすっていうそういう風潮は出てきてますけども。実際に本当に直接こうやって障害のある方と接しながら仕事をするという機会はそう多くはないと思うんですよね。そういう意味でそういう機会が持てた。で、なおかつやってみると仕事の品質の高さ、こういうのにかなり驚かされていたっていう印象はありますよね。

加納：そうですね、仕事をやらせていただいているわけですから品質を確保するというのはあたりまえのことなんだけれども、それをあたりまえのことをしっかりやり続けるっていうことの難しさとか大変さみたいなものも一方であるから、それは担当しているスタッフとメンバーの本当に皆が協力しあってるからできることかなと思いますね。

加納：はい、ありがとうございます。それではここで1曲、曲を聞いていただきたいと思いますが。札幌チャレンジドからリスナーの皆さんへのメッセージソングです。

岡野：1年間のメッセージを。

加納：いのうえ じゅんさんの『お世話になりました』、お聞きください。

加納：三角山放送局から、札幌チャレラジオ通信をおとどけしております。あと残り15分ほどの後半をお聞きください。札幌チャレンジドのこの札幌チャレラジオ通信も、本当に最終回ということで。

岡野：残り10何分で、おわっちゃいますね。

加納：カウントダウンがどんどん進んでおりますが。後半は各グループの人にそれぞれのグループの札幌チャレのこれからっていうことで、やっている内容が札幌チャレンジドで働くという働く支援、企業で働くという働き方、あと札幌チャレのパソコン講習とかですね。あとその三つの部分で3回出てきて、それぞれの分野で札幌チャレ、「ああこれからこんなことに

向かっていくんだ」ということについて、話してもらいましたが。岡野さんは事務局長ということで、全体を見ていただいておりますが、岡野さんの目から見て札チャレはこれからどこへ進んでいけばいいでしょうか。

岡野：ちょうど2年前ですかね、15周年に向けて職員が1年間ずっと毎月集まって、「どういう方向に進めようか」で最終的に決まった「MIX COM（これは札チャレの造語ですけどね。やっぱりそれが混ざりあう世の中のコミュニケーションの中でって。それがいま実際のロゴの中に入っていますけど。まあロゴっていいですか、ITでマザル、ハタラク拓きあう、まさにやっぱりそれかなって思っていますね。やっぱりハタラクっていても、たんに障害者枠で会社の隅っこでハタラクってということじゃなくて。やっぱり会社の中で、皆同じ社員なんだというスタンスで働ける世の中になっていかなきゃいけないのかなというこおとですね。

加納：本当にNPOってというのはミッションを掲げてそのミッションをどう位置付けにしていくかっていうことで。ミッション自信がそんなに変わるものではないんだけど、やっぱり時代とともに、社会のミッションを実現するアプローチは変わってくるし。もう15年、16年経ってると、最初のころは本当に皆でパソコン講習をとにかく一生懸命やってやっていかないとならなかったけど。いまはね、いかにしてしっかりと働くっていうことで、軸足はそこ大きくなってきてますね。

岡野：そうですね。ましてや、働くうえでの一つの武器といいますかね、そういうのがパソコンであったり、最近でしたらタブレットだったり、スマホだったり。やっぱりそういうIT機器、こういうのを活用すれば本当に世の中で働けるような環境になってきているかなと思います。

加納：なるほどね。まあ、札幌チャレンジドはずっとぼく何かは人材育成、人を育てるっていうことが中心だったと思うんだけど、それは障害のある人にパソコンやコミュニケーショントレーニングで障害のある人が育つということはずっとやりつづけてきたんだけど。やっぱり本当に開きあうとか障害のある人がいろんな所でしっかりと働くようにするためには、企業側の理解というんですか、社会の理解っていうかそこも1歩踏み込んでやっていかないとなかなか。パソコンが使えるようになりました、コミュニケーションもある程度できるようになりました。でもなかなかまだ受け入れてくれる企業が少ないとかですね、そのへんはどうでしょうかね。

岡野：そうですね、ちょうど12月、ある団体さんのセミナーというか研究会にお話をさせていただいて、その中である企業さんともいろいろ現状お聞きしたところ、やっぱり一番大

きなのがいままで法律上では身体とか知的の方の雇用率がとそれだけで進んでいたのが、最近例えば求人を出してもそういう方々が少ない。でだんだん精神ですとか発達障害の方の応募が増えてきている。でその人たちの対応というか配慮の仕方についてやっぱり企業さんてまだひじょうに自信がない、まだ弱い面がある。そこが悩んでらっしゃる点かなと思いましたね。

加納：なかなか結局はそういう人たちとわれわれが会社に入るまでの社会とか、一般の暮らしの中でそういう人たちと繋がることがないので、仕事だから、職場にいるからっていてもどういうふうに。特に発達障害の人何かは特性がひじょうに強いので、やっぱり特性に合った仕事のマネージメントととかしていけないと、結構ぶつかったり、誤解をうむとかがありますね。

岡野：特に企業さんてそういう方々と今まだ接する機会が少ないように感じるんですよね。ただ、結局障害名だけで結構考えちゃって、実際そういう方々が入ってきたらどう対応したらいいんだろうかともうその時点で悩んじゃってるということがあって。まあそういう意味でももっともっと混ざりあうっていう形で、世の中のそういう人たちとのいろいろ接点を数多く持つってというのが今後企業さんにとっても、大切なことじゃないかなと思ったりしてます。

加納：そうですね、まあ社会全体の流れでいくといわゆる人口減少社会に入っていて、生産労働人口っていうか、そういう働ける人口っていうか、そういう働ける人の数もやっぱり増えてきて高齢化が進む。そういった中で障害のある人でまだまだ若くて働く力が本来ある、そういう人が本当に社会に普通にいられるようにしていけないと社会そのものになりたないんじゃないかな何て私は強く思いますけどね。

岡野：そうですね、ゲストで出ていただいたんですけど札幌学院大学のキャリア支援課の加藤課長とかも、今は、学院大学の発達の方とかを中心として、障害の方のインターンシップってものを我々が去年から受け入れるようにしているんですけど。やっぱり今まではそういった方々のインターンシップは、企業さんでも受け入れはしないっていう、学生さんなんだけどインターンシップが受けられないっていう、そういうひじょうにもどかしいところがあったと思うんですけど。そういうのが我々のような所でも受け入れて少しでも世の中がどうなっていくのか。あるいは企業だけじゃなくて、こういう働く場っていうのもあるんだよっていうのも見ていただける。こういうのも一つスタートしたことかなとは、思ってますけどね。

加納：そうですね、そういう意味では障害者手帳があるとかないとか、関係なく例えば長く

引きこもっている人、若者で5年10年引きこもっている人もやっぱり結構いるようで。そういう親の会の集まり何か見ていると、我々は在宅就労っていうことも実現していますから、どうしても心の事情で外には出れないんだけど、でも働くことでやっぱり社会と繋がるとかそういうことはできるし、そういうことを望んでいる人は多いと思うので。

岡野：実際うちのA型で働いている方でも、やっぱり卒業してから引きこもりになっていた方っていうのも結構いらっしゃいますしね。で、我々札幌チャレンジドは全ての障害者の種別の方を利用いただけるということで。実際に身体、知的、精神、発達、全ての方がこうやって仕事をされて。我々も日々：そういう方と接することができて。精神だからとか、発達だから、この仕事ができるできないじゃなくて。やっぱり個人の特性によって、素晴らしい能力を発揮することが多いっていうのが、我々実際現実に見ていますからね。こういうのを早く企業さんにお伝えしてあげて、企業でも採用して大丈夫なんだよっていうのをやっていく必要があると。

加納：そうですねそういう意味では、札幌チャレンジドならではっていうか他ではなかなかそういうサポートしていることがないってことでいうと、視覚障害の方がね、働く支援何かこの札幌チャレのこれからっていうことを考えると、もううちがやらないとこの社会の中で誰もそこ進まないというような感じが、これも強いですね。

岡野：そうですね、まあ視覚障害のある方もうちの移行支援とかで事務職を目指すっていう、そういうすごい目標を持って来られてる方っていうのが結構多いです。

加納：うちで、札幌チャレンジドで働くってことでパソコン講習講師を目指している全盲の男性の人何かもいますし。だから眼の不自由な人イコールマッサージじゃなくて、眼の不自由な人もパソコンを使いながら、生かしながら自分の隠れた能力を引き出して働けるっていう、そんなところもありますね。

岡野：そうですね、既にうちを利用された視覚の障害者の方も4・5名ですよ、実際に就職されて。

加納：はい、コールセンターで働いている方が多いですよ。

岡野：そうですね、そういう方もいらっしゃいますし。あと合わせて視覚の方が毎日通ってきてここで勉強して、研修しているっていうために、やっぱりそういう配慮をした環境を作らなければいけないっていうのもちょっと札幌チャレではチャレンジしてますから。ああいう

のをやっぱり企業さんが見学に来た時もすごく興味を持ってご覧になるんですよね。

加納：やあそういう意味ではね、まだまだ我々本当に弱小 NPO だけでもやらなきゃいけないっていうかね、やっていきたいと思うことが沢山ありますね。

岡野：そうですね、まだまだ。

加納：ありますよね、先週パソコン講師の時に少しお伝えしましたが、来年の 4 月から今度は子供。

岡野：そうですね、はい。

加納：障害のある中学生、障害のある中学生高校生を対象にしたパソコン講習を始めるんですけど。ぼく何かちょっと大胆に言っちゃうと、日本で最初の障害のある子供のためのキャリアデザインセンターを創るんだみたいな、そんな思いがありまして。ただ障害のある子供にパソコンを教えるっていうことではなくて。やっぱりキャリアデザインですから、将来自分が大人になっていってどういうふうに働きながら社会の中でいっていくのかっていうことがしっかりとイメージできて、そこに向かってトレーニングして、実際パソコンを使って働くと。そういうことを一気通貫でできるまあキャリアデザインセンターってというのは、私が知る限りでは日本の中にまだないと思うので。それを一つの事業社会、一気通貫でやれるっていうことをこの札幌からぜひ生み出していきたいなというふうに思っています。

岡野：そうですね、そうやって実際に障害のある方が働いてたり、就職のためにいろいろ勉強されてると。そこと同じ場所でそうやって放課後でということが出来るわけですからね。

加納：そうですね、理屈じゃないんですよね。普通にそういう姿が目に見えて、それが当たり前なんだって思ってもらえたらいいんですよね。何か特別なことではなくて。それを本当に日常化して、当たり前にしていきたいなと思います。もうこのテーマ曲がかかってきますと、あと 2 分というお知らせでございます。札幌チャレンジドのホームページで、この札幌チャレンジド通信の音声でまず聞くことができます。音声アーカイブスに入って、パソコンで 1 月からこの全 50 回の放送を聞けますし。読むラジオということで、文章で読めるように我々がしゃべっている声をテープ起こしをしてもらって、それを読むこともできます。こういう音や文字でこの札幌チャレンジド通信、お世話になった、放送してきた内容を振り返ることができますので、もし札幌チャレンジドのことに興味を持っていただくことがおられましたらまたそういうのも聞いていただいて、ぜひぜひ札幌チャレンジドにお問い合わせをいただければと思います。札幌チャレンジドの問い合わせは、札幌 011~769~

0843。月曜日から金曜日午前 9:30~午後 5 時 30 分まで営業をしております。本当に、まずはリスナーの皆さん 1 年間ありがとうございました。

岡野：ありがとうございました。

加納：そしていつもガラスごしで我々の番組をサポートしていただきました石川さん、ありがとうございました。

岡野：ありがとうございました。

加納：そして三角山放送局者の皆さんも本当にありがとうございます。この番組は今日で終わりますが、近い将来ぜひ復活したいな。

岡野：続札チャレラジオ通信。

加納：やりたいと思っていますので、またこの三角山放送局から皆さんとお会いできますように。またお会いしましょう、さようなら。

岡野：1 年間ありがとうございました。

加納：ありがとうございました。さようなら。

岡野：さようなら。